

## 気付きの質を高める生活科学習についての研究

—気付きと思考・表現との関係性を手掛かりにして—

近藤 彩子<sup>†</sup> 加納 誠司\*

\*生活科教育講座

### A Study of Living Environment Studies to Improve the Quality of the Children's Awareness :

Focusing on the Association between Awareness and Thinking/Expression, and their mutual development

Ayako KONDO<sup>†</sup> and Seiji KANO\*

*Department of Living Environment Studies, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

#### 要 約

本稿は、新学習指導要領で示された「自立し生活を豊かにしていく」という究極的な児童の姿を求め、気付きの質を高めていくことを目指して研究したものである。生活科での気付きとは、一人一人に生まれた個性的なものであり、確かな認識へとつながるものとして重要な役割をもつ。活動や体験を通して、自分とその周りの対象との関係が深まると、思いや願いを実現しようと対象に働きかけることができ、「無自覚な気付き」から「自分自身への気付き」へと段階的に高まっていく。さらに、気付きは思考・表現と関連させていくことによって相互に高め合うことができる。思考・表現と気付きがそれぞれ豊かに行き来することが大切である。気付きと思考・表現の関連付けを連続的・発展的に繰り返させることで、それらは相互に高められ、目指す子どもの姿の実現へと近づけられることを、理論と授業実践の考察から確認することができた。

Keywords : 気付きの質の高まり 思考 表現

#### I はじめに

生活科は創設以来、子どもたちの生活圏を学習の対象や場として、活動や体験を通して得た気付きをもとに、自立への基礎を養うことをねらいとしている教科である。

今次改訂の学習指導要領を受けて、生活科の教科目標に変化が見られた。平成元年から受け継がれてきた「自立への基礎を養う」から「自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す」<sup>1)</sup>に改訂されたのである。「自立『への基礎』」という言葉が変更されたのは今回の改訂が初めてであり、注目すべき変化だと捉えることができる。ここで示された「自立し生活を豊かにする」とはどのようなことを指すのであろうか。

生活科の教科目標のさらなる言及として、「自立し生活を豊かにしていくことは、生活科における究極的な児童の姿である」<sup>2)</sup>と示しており、次のように述べている。

生活を豊かにしていくとは、生活科の学びを実生活に生かし、よりよい生活を創造していくことである。それは、実生活において、まだできないことやしたことがないことに自ら取り組み、自分

でできることが増えたり活動の範囲が広がったりして自分自身が成長することでもある。ここでいう豊かとは、自分の成長とともに周囲との関わりやその多様性が増すことであり、一つ一つの関わりが深まっていくことである。そして、自分自身や身近な人々、社会及び自然が一層大切な存在になって、日々の生活が楽しく充実したり、夢や希望が膨らんだりすることである。

これらの文章から、自分自身が成長することが「自立し生活を豊かにしていく」ことに大きくかかわっていることがわかる。生活科の活動や体験を通して、「できなかったことができるようになってうれしい」「優しくなれた自分って素敵だな」というような自分自身への気付きを大切にすることは、自分自身の成長を自覚することにつながるのではないだろうか。さらには、自分自身の成長を自覚し「次は他のことにも挑戦したい」「自分ならきっとできるはず」と夢や希望をもって生活できることは、自立し生活を豊かにしていくことにつながるのではないだろうか。そして、それらは究極的な児童の姿の実現へとつながっていくものと考えることができる。

これまで、気付きについての研究は様々行われ、文

<sup>†</sup>大学院生 Undergraduate Student, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

科省からは「平成 20 年の改訂では、活動や体験を一層重視するとともに、気づきの質を高めること、幼児教育との連携を図ることなどについて充実を図ってきた」<sup>3)</sup>と生活科の経緯と成果としてあげられた。しかし、気づきの質を高めるために思考や表現との関連性を探究した研究は十分とは言い難い。

そこで、本研究では生活科学習における「思考・表現と気づきの関連性」に焦点を当て、気づきの質を高めていく姿を理論と授業分析から明らかにしていくこととする。

## II 生活科における気づきとは

土井は生活科と他教科との決定的な違いを 2 点あげている。その一つが「自分自身への気づきを大切な学習内容にしていることにある」<sup>4)</sup>としている。また木村は「生活科では『自立への基礎を養う』という究極の教科目標から、『自分自身への気づき』を最も大切にする。より具体的には、『わかるようになったぼく・わたし』『できるようになったぼく・わたし』に気付かせてもらいたい」<sup>5)</sup>と論じている。生活科の学習にとって「自分自身についての気づき」というものが重要視されていることがわかる。そもそも、生活科における「気づき」とはどのようなものなのか、「自分自身についての気づき」とはどのような状態を指すものなのかを明らかにしていく。

### 1 本研究における「気づき」の定義

「小学校学習指導要領解説 生活科編」において次のように「気づき」が説明されている。

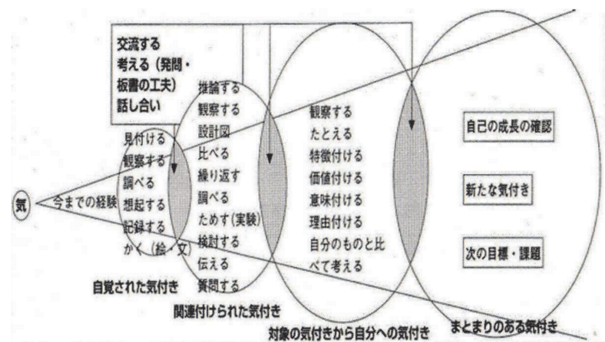
生活科という気づきとは、対象に対する一人一人の認識であり、児童の主體的な活動によって生まれるものである。そこには知的な側面だけではなく、情意的な側面も含まれる。自分が「あれっ」「どうして」「なるほど」などのように何らかの心の動きを伴って気付くものであり、一人一人に生まれた気づきは吟味されたり一般化されたりしていないものの、確かな認識へとつながるものとして重要な役割をもつ。<sup>6)</sup>

気づきは、ただ単に気付くということではなく、様々な特質があることが読み取れる。さらに、「生活科は、特に自分自身についての気づきを大切にしている」と続き、小学校低学年児童における自分自身についての気づきとして、次のようなことが重視されている。「集団生活になじみ、集団における自分の存在に気付くこと…(中略)…自分のよさや得意にしていること、また、興味・関心をもっていることなどに気付くこと…(中略)…自分の心身の成長に気付くこと」<sup>7)</sup>である。このような気づきは、友だちや身近な人々、成長を支えてくれた人々に関する気づきになり、自分自身が成

長への願いをもって意欲的に生活することができるようになることに発展していくのである。

## 2 気づきの質を高める

久野は「気づきは質的に高まることで、活動や体験は一層充実したものとなり、生活を豊かにしていく資質・能力は確かなものとして身についていく。」<sup>8)</sup>と述べている。活動や体験の中で気付かせるだけでなく、質的に高まるような工夫や手立てが必要なのである。



資料1 気づきのスコープ

資料1に示した「気づきのスコープ」<sup>9)</sup>では、気づきの質の高まりの段階を表現している。この資料を参考に、気づきの質の高まりを以下のように段階ごとに分類する。

第1段階では、「無自覚な気づき」が「自覚された気づき」に高まる。子どもたちは、活動の中で対象と関わりながら様々なことに気付いていく。しかし、子どもたちは気付いているということに気付いていなかったり、気付いても一時的ですぐに忘れてしまったりすることがある。「無自覚な気づき」が自ら表現することができる「自覚された気づき」に高まったとき、次の活動につながるものとなる。

第2段階では、「個別の気づき」が「関連付けられた気づき」に高まる。「気づき」とは対象に対する一人一人の認識であり、違いやその子なりの特性がある。その「個別の気づき」を比較したり共通点を見つけたりすることで、予測したり試したりすることができる。友だちの気づきと関わらせることによって、自分では気付かなかった気づきに目を向けることができる。「関連付けられた気づき」になることによって、さらに思考がはたらき、新たな気づきが生まれる。

第3段階では「対象の気づき」から「自分自身への気づき」に高まる。自分自身への気づきは、対象との十分な関わりがあり、充実した体験活動があつてこそ生まれるものである。アサガオに愛着をもち、より良い世話は何かと考えながら大切に育てたからこそ「アサガオを育てあげることができた自分」に気付くのである。自分自身への気づきは自信になり、次なる活動にさらに意欲をもって取り組める。

第3段階で自分のよさや可能性に気付いた子どもた

ちは、自己の成長を確認し、次の目標や課題をもつことができる。この目標や課題は子どもたちの将来に向けての夢や希望である。自分自身への気付きに高められた子どもの姿を菱田は「活動の中で自分を十分に発揮できるようになり、さらに活動が広がり、深まるようになる。それは生活科においてだけではなく、日常生活においても、さらには将来においても自分自身のあり方を一層強化していくのである」<sup>10)</sup>と述べており、「自分のよさや可能性に気付き、意欲や自信をもつことによって、現在および将来における自分自身の在り方を求めていくことができる」<sup>11)</sup>という精神的な自立につながる。自分自身への気付きまで質を高めることができたことで、夢や希望のような「まとまりのある気付き」を得られた子どもたちの姿こそが、自立し生活を豊かにするという究極の児童の姿といえる。

また「気付きのスコープ」からは、活動や体験で得られた気付きは思考を通して確かな気付きとなり、思考や表現を繰り返すことで新たな気付きへと高められていることがわかる。生活科における気付きと思考は一体的にとらえるべきではないか。

### Ⅲ 思考・表現と気付きの関係

#### 1 思考・表現と気付きの関連性

指導要領改訂の要点には、生活科における今日的課題となっている気付きと目指す資質・能力の一つ「思考力・判断力・表現力等の基礎」について次のような記述がある。

- ・ 具体的な活動や体験を通じて、どのような「思考力・判断力・表現力等」の育成を目指すのが具体的になるよう、各内容項目を見直した。
- ・ 具体的な活動や体験を通して気付いたことを基に考え、気付きを確かなものとしたり、新たな気付きを得たりするようにするため、活動や体験を通して気付いたことなどについて多様に表現し考えたり、「見つける」、「比べる」、「たとえる」、「試す」、「見通す」、「工夫する」などの多様な学習活動を行ったりする活動を重視することとした。<sup>12)</sup>

具体的な活動や体験を通して気付いたことを基に考えたり、多様に表現したりすることが求められている。無藤は「意欲を核としながら思考し、また表現する中で子どもは環境に出会い、自分について出会っていく。そこに様々な気付きが成立する。そのような気付きは新たな思考活動を生み出していく」<sup>13)</sup>と述べている。そこには思考・表現と気付きの関連性が見られる。思考し、表現することによって、子どもたちは体験から得られた気付きや思いを整理していく。そこで生まれた新しい気付きは、さらに新たな思考・表現活動につ

ながっていく。思考・表現と気付きを関連させていきながら、それぞれの質を高めることができる。

#### 2 思考・表現と気付きの相互作用

##### (1) 思考と気付き

思考は新たな気付きを生み出す作用がある。どんぐりゴマで遊ぶ子どもは、もっと長い時間回転し続けるためにはどのように改良したらよいのかを考える。どんぐりの形や大きさを比較してみたり、爪楊枝の長さを変えたりして何度も試していくうちに、「爪楊枝を指す穴はできるだけ真ん中に真つすぐ開けたほうがよい」「どんぐりは丸いものを選ぶとうまくいく」ということに気付いていく。思考しながら対象にはたらきかけていくことで、対象の特徴や面白さなどに気付きを深めていくことができる。

気付きは思考を促していく。良く回るどんぐりごまの特徴に気付くことができた子どもはそれだけでは満足せず、自慢のどんぐりゴマを使ってどのように遊べるかを考える。どんぐりゴマを回す場所を作ったり、友だちと競い合うためのルールを考えたりする。また、友だちのどんぐりゴマと比べることで違いや共通点のような新しい気付きを見つけ、改良に向けてさらに思考を巡らせる。気付きを基にすることで思考をはたかせることができる。

このように思考は気付きの質を高め、質の高い気付きは思考を発展させていくことができるのである。

##### (2) 表現と気付き

活動や体験の中で得られた気付きは、表現することによって自覚化することができる。低学年の児童は特性上、興味や関心、思考、感情が大きく動き、学習対象について気付きがあったとしても、それを覚えてもち続けていくということが難しい。活動した後、表現を通すことで無意識のうちにしていた発見や感動を思い起こし、引き出すことができる。冬に、小さく割った氷の破片を凍ったプールの水面に滑らせる遊びを行った。だんだんと遠くまで滑らせることができるようになった子にコツを聞いてみても、なかなか言葉で説明ができない。「ちょっと真似してみて」と提案すると、「こうやってちょっと膝を曲げて、それで…」とゆっくりと動作をして見せた。膝を曲げて腰を落とし、できるだけ低い位置から水面と水平になるように氷を滑らす様子がきちんと表現されていた。動作を思い出しながら「手の向きは…」など説明が加えられていく。無自覚のまま活動を楽しんでいた子どもは、表現を通すことで、その時の心の動きや上手に活動できた気付きを自覚化することができたのである。氷を滑らせるコツに気付いた子は、それを友だちに伝えにいった。友だちの氷遊びが上手になった様子を共に喜び、どちらの氷が先にプールの端に到達するか競争する遊びを始め、活動を存分に楽しむことができた。体験から得られた自分だけの気付きを友だちに表現したことによ

り、さらに遊びを楽しめるようになった自分自身への気付きとなって返ってきたのである。

また、質の高い気付きが生まれると、その気付きを表現して誰かに伝えたいくなる。例えば、学校の施設を探検することで、面白いものを見つけたり、素敵な人に出会ったりする。こうした発見や感動はみんなに知らせたいという気持ちを引き起こす。そこで、詳しく説明したり、絵に描いたり様々な表現方法を用いてなんとか伝えようとする。

表現することで気付きは質を高め、質の高い気付きは表現活動への意欲をかきたて、表現力を高めていくのである。

### (3) 思考と表現

思考と気付き、表現と気付きの関係を述べてきたが、思考と表現の間にも関連性が見られることがある。

思考が曖昧で、情報があふれ、伝えたいことが不明瞭であると表現することは難しい。表現することで自分の思考を整理し、必要な情報を選択して、伝えることを明らかにする。表現は思考するためのツールとなる。また、表現するときには受け取る側の存在がある。子どもたちは相手意識や目的意識に基づいて表現内容や表現方法を考えることになる。他者と伝えあったり振り返ったりする中で、思考が活性化することも考えられる。

朝倉は「思いや願いの実現に向けて活動する中で、具体的に考えたり表現したりすることやそれを繰り返すことによって自分自身や自分の生活に関する様々な問題や目的について考え、表現することができるようになるのである」<sup>14)</sup>とし、生活科での思考、表現などが一体的に行われたり繰り返されたりすることが重要だと述べている。

さらに朝倉は「思考や表現によって、例えば、ある気付きと別の気付きの共通点や相違点、相関関係や因果関係が確認された時など、気付きの質が高まったということが出来る。自分自身や自分の生活について考え、表現し交流することなどにより、気付きの質が高まり、学習対象が意味づけられたり価値づけられたりする」とし、思考と表現を一体的に行ったり繰り返していったりすることで、気付きの質が高められることが価値づけられた。

## IV 授業分析

### 1 分析の視点

ここまで、気付きの質は段階的に高められ、自分自身への気付きを大切にしていくことや、気付きの質を高めていくためには思考と表現との関連性を重視していく必要があることを述べてきた。本章では、上記のような立場に立ち、思考と表現が気付きに作用している場面や、気付きの質が高まった場面を分析するこ

とで、考察を進めていく。

### 2 実践の背景

今回取り上げる授業は、筆者が令和元年に瀬戸市立深川小学校1年生の学級で行ったものである<sup>15)</sup>。

深川小学校は明治36年に誕生し、長い間地域の方々に愛されてきた。しかしながら、令和2年3月に閉校し、子どもたちは新設校である小中一貫校「にじの丘学園」へと入学することとなった。

本学級は、1年生9名の小規模学級であった。1年生の子どもたちにとって、深川小学校は1年間しか通うことができない。たった1年かもしれないが、大切な母校には変わりはない。「深川小学校で過ごしてよかった」「9人と一緒に学んでよかった」と心から思えるような経験をすることは、次の学校に向けての夢や希望をもつために必要なことと考える。

今回の活動の中心となるのは1匹のウサギ「ふかびよん」の飼育である。毛がふわふわなのと、深川小学校のみんなに可愛いがってもらえるようにとの願いを込めて「ふかびよん」と名付けられた。

子どもたちが一生懸命に世話をし、一緒に同じ教室で過ごしてきたウサギは、閉校を迎えてしまえば飼えなくなる。今後はどうしたらよいのか、大好きなウサギのために何がしてあげられるのかという問題を解決すべく、子どもたちは本気になって考えようとする。そこで生まれた思いや願いを実現させようと、本気で表現しようとする姿が期待できる。また、自分たちにも同じように深川小学校に別れを告げ、新しい環境が待っているのだということ、飼育を通して考えるきっかけになる。そして、本気で活動した後には、様々なことができるようになったと感じられるはずである。一回り成長した自分自身の姿に気付き、自信と希望をもって次の学校へ入学してほしい。これらの願いをのせて、取り組んだ実践である。

### 3 活動の実際

#### (1) 思考・表現と気付きの連続

ふかびよんは、普段教室の中を自由に走り回ったり、ロッカーの中に入ったりして遊んでいる。時にはロッカーに収納してあるものを全部出してしまったり、ゴミ箱の中に飛び込んだりするなど、かなりのいたずら好きだと子どもたちは認識していた。そんないたずら好きのふかびよんのために、「教室は遊ぶ場所がないから、遊び場を作ってあげたらいいんじゃない？」という意見が出た。そこで、どんな「ふかびよんパーク」をつくったらよいか話し合いが行われた。

C1: ブランコを作ったら楽しそうじゃない?

C2: いいね。滑り台を作って、ふかびよんが上から滑れる



- ようにしたらいいと思う。① 段ボールを重ねて、斜めにしたら滑り台はできる。
- C3：クレヨンでカラフルにするときれいなふかびよんパークになるから、そうしたい。
- C4：自分たちが遊ぶんじゃないんだからさ、ブランコなんてあぶないよ。
- C5：ふからかのマットを入れてあげるとか、よく雑巾で遊んでるから、ふかびよんの好きなものを作ってあげたい。②
- C6：怪我したら楽しくないから、怖くないやつにすると思います。
- C7：私は、さっきのふかびよんの好きなものを作ってあげる意見に賛成です。好きなものがいっぱいあったほうが、ずっと使ってくれると思うからです。
- C1：じゃあ、ふかびよんの好きなものは狭いところだから、トンネルがあるといいと思う。③
- C3：あ、保育園のとき段ボール迷路があって、それがトンネルみたいだったから、そうやってやればできる。
- C2：あったね。どんどんってなってる(段ボールが積み重なって)上のところから顔が出せるやつ。

下線①の意見を出した子ども達は、遊具で遊ぶのがブームだった。自分たちが楽しく遊んでいるイメージにふかびよんが楽しむ姿を重ねていた。この段階での考えは自分の生活とつながっているものの、自分中心の思い付きである。自分にとって楽しいものはウサギにとっても楽しいものだと考えており、ウサギにとってどのような遊び場が相応しいのかまでは想像できていなかった。

ふかびよんと生活をしてきた中で、高い所やいたずらが好きだということを知っていた子どもたちは、話し合いをする中で、下線②③のように、よりふかびよんに合った「ふかびよんパーク」とは何かを考えた。ふかびよんの好きなものを形にするとよいという関連付けられた気付きから、パークの製作が始まった。

完成後、パークの中でくつろぐふかびよんの様子を見て満足した子が、今度は看板とチケットを作り始めた。みんなの考えを合わせて一生懸命に作ったふかびよんパークは、自分たちの自慢の作品となった。協力して作り上げることができた自分たちの良さに気付き、自信をもつことができた。その自信から他の人にも見てほしいと願いをもったのである。チケットは同じフロアで生活している2年生に配り、休み時間に見に来てもらえるよう声をかけていた。

ふかびよんが気に入ってくれた場所を作ることができた自分たちに自信をもち、次の活動へと意欲をもつことができたのである。思考・表現と気付きを連続的に関連させていくことで、より質の高い気付きへと導くことができた姿といえる。

## (2) 課題解決に向けての本気の思考へと発展

### ① ふかびよん会議

朝、教室に行けばウサギがいて「ふかびよん、おはよう」と声を掛けることが当たり前ようになった。子どもたちのウサギに対する愛着が高まった時期だからこそ、子どもたちに「深川小学校はもうすぐ閉校する」という言葉を投げかけた。新設校に飼育小屋は無い。新しい学校ではウサギは飼えないことを伝えると、子どもたちが一気に口を閉ざした。言葉の生まれぬ中、「先生、ふかびよん会議をしたいです」と声が上がった。

ふかびよん会議では、「学校でふかびよんが飼えないのなら、どうしたらよいか」「何がしてあげられるか」という話し合いをすることになった。

- C1：ぼくたちがお世話できるぎりぎりまで、かわいがってあげたい。
- C2：でも、ぎりぎりまで一緒にいたら、飼えなくなった時は誰が世話をするの？
- C3：みんなが家で飼えばいいんじゃない？
- C4：うちは猫がいるから飼えないよ。ママがダメって言うもん。
- C5：うちは飼ってもいいよってしてくれるかもしれないけど、1匹だけね。他の5匹は無理かも。
- C3：地域の人にお願ひすれば？「あと5匹です。お願いします」って。
- C6：チラシとか書けばいいじゃん？「ウサギをもらってください」って書いて。
- C2：回覧板に挟めば見てくれると思う。
- C1：もらってくれる人がいなかったら？
- C6：がんばって探す。
- C7：せっかく一緒に暮らしていたのに、みんなバラバラになったらかわいそう。
- C2：みんな一緒に飼ってくれるところがあればいいのにね。
- C8：パパの学校はもうウサギを飼ってるから駄目だと思う。
- C9：学校みたいな大きいところだったら、ふかびよんも、みんなも飼ってくれるかも。
- C6：飼育小屋があるところにお願ひしたらいいかもしれない。  
(前の話し合いと児童の番号の関連無し)

子どもたちは、何とかしてこのまま飼えないだろうか、自分たちの代わりに世話をしてもらうことはできないだろうかと思いを話し合った。今まで世話をしてきた大切なウサギだからこそ、何とかしたいという気持ちが強くはたらい。自分たちで協力し合って答えを作り上げなければならないという状況こそが、子どもたちなりにもっている体験から得られた知識を総動員して考え、思いつくことを次々に発表しようとする動機になった。少しでも可能性はないかと思いを巡らせ、自己の中で生まれた思考を友だちと対話することにより広げていった。この会議では解決するような答えは出せなかったものの、授業時間いっぱいまで話し合いをすることができた。

最終的には子どもたちとも再度話し合いの場をもち、市内の原山小学校にお願ひして、飼育小屋にいるウサギも含めて全て引き取ってもらえることになった。

②ウサギ交流会に向けて

大型テレビモニターの画面を通して自分たちの声と思いを直接原山小学校の3年生に届けたいと考えた子どもたちは、どんな内容でどのように伝えたら、自分たちの願いが伝わるのか考えていった。

伝える内容の話し合いでは、「世話の仕方を教えてあげたい」「抱っここの仕方を言うのはどう?」「ふかびよんのかわいいところを発表する」などの意見が出た。これまで世話をしてきた中で、子どもたちの中にはたくさん気付きが蓄積されていた。子どもたちの頭の中は、大好きなウサギが原山でも大切に世話をしてもらえるようにと、原山小学校の子に教えてあげたい気持ちでいっぱいだった。ある子が「ぼくたちの学校がなくなっちゃうことをちゃんと説明して、きちんとお願いしますって言わなくちゃいけないと思います」と発言した。それまでは、教えてあげるという押し付けがましい内容ばかり発言していた子どもたちが、原山小の子どもたちのことを考えて発表を作り上げなくてはならないと気付き、視点を変えることができた。自分たちの思いや願いが中心だった子どもたちが、相手を意識しながら必要な情報を整理し、よりよくしていこうと考えることができたのである。課題解決に向け子ども同士の思考は活発になり、より本気度を増して多様な気付きへと発展した。

(3) 思いを届ける本気の表現

① 台本作成

原山小学校の子へ発表する言葉は、すべて子どもたちが考えた。相手が気持ちよく聞いてくれるためにはどんな言葉遣いにしなくてはいけないのか、世話に困らないようにするために必要な情報は何か、順番はどうしたらよいのかを本気になって考えていた。

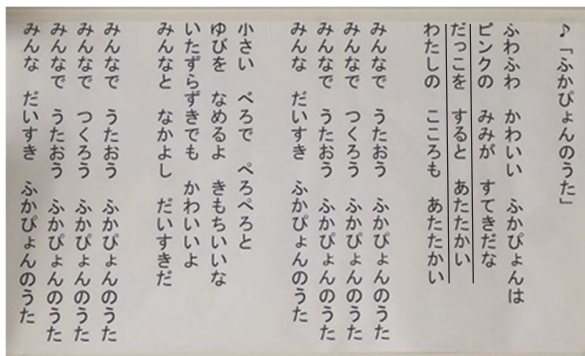
- ・ ふかびよんはいたずら好きですが、寝ているところはとってもかわいいです。
  - ・ 穴を掘るのが得意なウサギなので、狭い所や暗い所が好きです。
  - ・ お尻を手で押さえると上手に抱っこできます。
  - ・ うんちはコロコロしているので簡単に掃除できます。
  - ・ おしっこマットは端っこの方からくるくる巻くとこぼれずに片付けられます。④
  - ・ 悪いことをしたらダメだよって教えてあげてください。
  - ・ ふかびよんと一緒に過ごしてきて、いいことや楽しいことがたくさんありました。
  - ・ わたしたちは、ふかびよんと別れるのがすごく悲しいです。
  - ・ だけど、原山小学校のみなさんが飼ってくれると聞いたので安心しました。⑤
- (一部抜粋)

ウサギと過ごしてきた日々を思い出し、その中で気付いた世話のコツを台詞の中に盛り込んだ。ウサギ飼育の先輩である2年生に掃除の仕方を聞かなくてはな

らなかつた頃と違い、この時期には世話の仕方が格段に上手になっていた。下線④のように、原山小学校の子に伝えたい飼育方法として表現することで、自分たちが行ってきた世話の仕方を振り返るきっかけとなり、効果的な世話の方法を認識することができた。また、飼育を続けてきたからこそ身に付けることができたコツを台詞に表現したことで、世話の仕方が上手になった自分に気付くことができた。下線⑤では、台詞の順番を意識することで、ウサギと過ごしてきて楽しかった、別れがあるから悲しい、でも大切に世話をしてくれる人ができて安心したという自分たちの感情の動きに気付き、捉えることができた。

② 「ふかびよんのうた」作り

さらに、発表を楽しんでもらえるように「ふかびよんのうた」を作った。「ふかびよんのうた」は、春から年間を通して生活科で作詞を行ってきた「きせつのうた」のメロディーをそのままに、替え歌として作ることにした。この歌作りはリズムやメロディーが決められており、限られた文字数で伝えたいことを表現しようとするので、自然とより良い言葉や内容を選別して作詞をすることができる(資料2)。



資料2 ふかびよんのうた

縦線部「だっこを すると あたたかい わたしの ころも あたたかい」の歌詞は、上手に抱っこできるようになった時に、腕の中のウサギの体温を感じることができた瞬間の感動を表現している。大好きなふかびよんと心から触れ合ったからこそ「わたしの ころも あたたかい」という言葉が生まれたのである。伝えたい重要な気付きがあったからこそ、高い表現力が生まれたと捉えることができる。

③ ウサギ交流会

A 児は幼さから自分の感情をコントロールできず、他の子どもとぶつかることが多かった。本單元においては、動物が大好きなので進んで世話をしていたが、自分とウサギとの関係でしか考えられず、自分の思いを優先に行動してしまうという場面があった。A 児ははじめ「抱っここの仕方が危なくてかわいそう」と、ある子から指摘されても聞く耳をもたなかった。そのA 児は、ウサギの世話を通してほかの子どもと協力する経験を重ね、少しずつ周囲との関わりを広げていった。

何度も練習してウサギ交流会本番を迎えたこの日、大きなテレビ画面に原山小学校の3年生の子どもたちの顔が映った瞬間に、A児は背筋を伸ばした。発表はとても気持ちが入っていて、担当の台詞はしっかりと声を出すことができた。普段は音楽の授業を苦手と感じていたようで、参加しないこともあったが「ふかびよんのうた」は、両足をしっかりと踏みしめて歌っていた。しっかりとカメラを見つめるA児からは、原山小学校の子どもたちに伝えるのだという強い意志が伝わってきた。A児の姿には二点の要因が考えられた。一つは、ふかびよんと自分の周りの世界が広がったことである。友だちと協力すると、ふかびよんが喜ぶ世話ができる気付いたA児は、自分の思いを少しずつ周りの友だちに伝え、関わりを見せるようになった。自分以外の人の存在を意識したことで、外に向けて表現できるようになったのである。もう一つは、原山小学校の子どもたちが、自分たちの大好きなウサギたちを大切にしてくれる存在として認識したことである。その相手が同じ時間に画面越しに存在し、自分たちの発表を受け止めてくれることがわかったからこそ、本気で発表に向かうことができたのである。

深川小学校の子どもたちが発表した後、原山小学校の子どもたちが「とてもわかりやすい発表でした」「ふかびよんがやってくるのがとても楽しみになりました」と感想を伝えてくれた。その後「ふかびよんは外の飼育小屋で飼っても大丈夫ですか?」「ほかのうさぎとは家族ですか?」「どうやってお水をあげていましたか?」などの質問も返ってきた。台本には無いやり取りではあったが、その場で考え最適な答えを返していた。自分たちの言葉を求めてくれる相手がいることで、より真剣に言葉を選択し、話すことができた。

交流会後、振り返りを行った。「Aさんが、しっかりと立って頑張っていて発表しているところがよかったです」と周りの友だちに自分の頑張りを認めてもらえて、A児はとてもうれしそうにしていた。

(4) 本気の思考・表現によって高められた気付き

#### ① 絵日記

振り返りの活動として絵日記を書かせた。人前でおどったり歌ったりすることが大好きなB児は、みんなを引っ張るように「ふかびよんのうた」を歌った。「ちょっときんちょうしたけどがんばってはいっぴょうできました」(資料3)という言葉通り、自分の良さを存分に発揮できた発表だった。また、上手な発表ができたのは、自分たちの練習の成果もあるが、それだけでなく通信相手である原山小学校の子どもたちが上手に聞こうとしてくれたからこそ上手な発表ができたとしている。相手の存在があったからこそうまくいったのだということに気付くこともできた。B児の発表を聞いて、他の子どもたちも聞き手の存在があったから、良い発表ができた気付かされたようだった。「原山小学

校の子が気に入ってくれる発表ができたのがよかったね」と友だちから価値付けられ、発表をやり切ることができた自分を肯定的にとらえることができた。本気で考え、本気で表現し、自分がやり切ったと思うような体験をすることができれば、子どもたちは自分自身の頑張りに気付き、良さを認めることができることがわかった。思考や表現を気付きと関連付け、相互にはたらかせることで、自分自身への気付きへと質を高めていくことが明らかとなった。

わたしは うたを うたって じょうず だったよ。ちょっと きんちょう した けど がんばって はっぴょう できました。 はらやましよう学校が じょうずに きいて くれた ので じょうずに はっぴょう できました。

#### 資料3 B児の絵日記

#### ② ふかびよんへの手紙

ふかびよんと別れる日、教室でお別れ会を開くことにした。その中で、ふかびよんに宛てて手紙を書いた。手紙は体験後の振り返りカードと異なり、無理のない形で自分自身の活動を振り返って考えることができる。加えて、自然と自分の気持ちと素直に向き合うことができる。

ふかびよん いままで いっしょに いて くれて ありがとう。ふかびよんが いれば じぶんに ゆうきが わいて くるよ。かなしい ときも うれしい ときも いっしょに いれたら どんなん ことも できる。はなれても ころろは ずーっと いっしょ。いままで ありがと。

#### 資料4 C児の手紙

C児の手紙には、「ふかびよんが いれば じぶんに ゆうきが わいて くるよ」と書かれていた。今まで世話を続けてきた中で得た経験が自分の中で積み重なり、それが自信となり、勇気が湧いてくると表現していた。C児は、はじめは指先でしかウサギを触ることができなかった。ふかびよんとの触れ合いを重ね、愛着を高めていったことで「ころろは ずーっと いっしょ」と表現したように、心が離れられない大切な存在に変化していった。自分とふかびよんとの関係が深まり、自分の周りの世界が広がった。

だっこ さしてくれて ありがとう。ふわふわで きもちかったよ。いっしょうけんめい せわを できるように なったよ。だから よけいに かなしい よ。

#### 資料5 D児の手紙

D児の手紙には、抱っこした感覚がすぐに思い出されるほど、ふかびよんと触れ合ってきたことがわかる。「いっしょうけんめいせわをできるように なったよ」

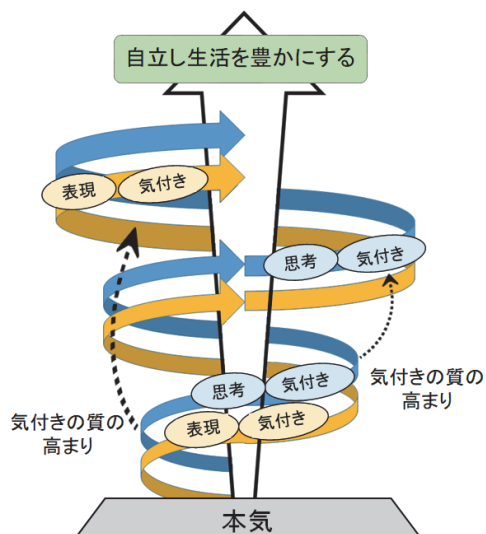


と書かれていた通り、できるようになったことが増えた自分の成長に気付くことができました。世話ができるようになって、様々なことに気付いたり、感じられたりするようになったからこそ「よけいになしいよ」という自分の気持ちにも気付くことができました。

愛着が高まったふかびよんに対して、最後の思いを伝える活動は、子どもたちの言葉が自然に引き出される活動であり、今までの体験を振り返りながら、自分自身への気付きまで質を高めることにつながった。

## V 本研究のまとめ —成果と課題—

本研究では、生活科における究極的な児童の姿を目指すために気付きの質を高める授業づくりについて探った。気付きは段階的に質を高めることができ、自立し生活を豊かにするという目標を目指し、「自分自身についての気付き」まで質的に高めることが必要であることを明らかとした。また、気付きは、それ自体で高まっていくものではなく、思考や表現と相互に関連付け、豊かに行き来する中で、連続的・発展的に繰り返され、螺旋状に高めていくことができると整理された。さらに、子どもたちの本気の思いが、思考・表現と気付きをしっかりとつなげていく支えになっていることもわかった。本研究の成果を構造的に示すと資料6のようになる。



資料6 螺旋状に高められていく気付き

一方課題として、本気の心のメカニズムやその動きと気付きと思考・表現の関係性については十分に言及することができなかつた。今後は、残された資質・能力、学びに向かう力・人間性も含めた理論化、さらなる授業実践に努めていきたい。

本稿で言及した実践の中心的な対象であった1匹の小さなウサギは、気付くと子どもたちにとって大きな存在となっていた。子どもたちは、このウサギを通して、本気で考え、本気で活動する中で様々な経験をすることができた。悩んだことやうまくいかないことも

たくさんあった。しかし、少人数のこの学級だからこそみんなと深く話し合ったり、行動したりすることで、できることが増えた自分に気付くことができた。一足先に引っ越しをすることになったふかびよんから、自分たちも同じように新しい学校に進学することや、一年間過ごした深川小学校が閉校すること、新しい生活が待っていることをより具体的にイメージすることができた。

みんなで本気で取り組んだ経験があるからこそ、にじの丘学園でもきっと大丈夫だと思えたようである。「ふかびよんが頑張っているから、ぼくたちも頑張らなくちゃね」とつぶやいた子どもたちは、新しい生活に向けて踏み出すことができた。

## 【引用・参考文献】

- 1) 文部科学省「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 生活編」2019年 p.8
- 2) 上掲書1) p.11
- 3) 文部科学省「生活・総合的な学習の時間ワーキンググループにおける審議の取りまとめ(生活)」p.1 2016年8月26日  
[https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377064\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377064_1.pdf) (2021年11月13日取得)
- 4) 土井徹 須本良夫編著「生活科で子どもは何を学ぶか キーワードはカリキュラム・マネジメント」東洋館出版社 2018年 p.85
- 5) 木村吉彦「生活科の理論と実践—『生きる力』をはぐくむ教育のありかた—」日本文教出版 2012年 p.217
- 6) 前掲書1) pp.12-13
- 7) 前掲書1) p.13
- 8) 久野弘幸「小学校新学習指導要領ポイント総整理生活」東洋館出版社 2017年 p.66
- 9) 新原秀典「初等教育資料」(文部科学省) 東洋館出版社 2011年 No.876 p.75
- 10) 菱田尚子「生活科における『気付き』の特質と『気付きの質の高まり』の姿の明確化」生活科・総合的学習研究 2010年 p.72
- 11) 前掲書1) p.11
- 12) 前掲書1) p.7
- 13) 無藤隆「体験が生きる教室—個性を伸ばす学習・表現・評価」金子書房 1994 p.2
- 14) 朝倉淳「平成29年改訂小学校教育課程実践講座生活」ぎょうせい 2018年 p.16
- 15) 拙著「本気で考え、本気で表現できる生活科教育—1年生ウサギ交流会の実践を通して—」瀬戸市生活科・総合的な学習研究会会誌「せいかつ・そうごう29号」2020年 pp.4-12